

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

＊ 昭和28年2月14日の部分日食の北海道新聞夕刊の記事

国立天文台天文情報センター普及室の室井恭子氏に友人から表記の日食の記事が届けられ、アーカイブ室の筆者の手に渡った。この日食は食分が50%程度の部分日食であり、天文学的にはあまり重要視されず、プロの観測としては、海上保安庁水路部が食の始まりと食の終りの時刻観測を行い、計算と実際の誤差の検証、天体位置表の検証などの観測が行われたに過ぎなかったようだ。この部分日食が観測された函館地方の様子を報じた昭和28年(1953年)2月15日付けの北海道新聞夕刊の記事(写真1)を入手したので紹介する。



写真1 部分日食の観測を報じる北海道新聞(昭和28年2月15日付)夕刊

この頃の日食では、第1接触、第2接触、第3接触、第4接触（この場合には第1接触と第4接触）の正確な時刻を観測し、月の運動を詳細に研究することが行なわれており、この記事では芸大函館分校物理学教室の観測の様子、市内の高校、中学校、小学校の科学班の観測の様子を報じている。天候に恵まれず、薄雲を通しての観測だったようだ。

今年（2009年）7月22日の日本を皆既帯が通る皆既日食では、やってはいけないと言われている「手製のいぶしガラス」をかざして観ている写真が掲載されている。

この部分日食時に、太陽電波、電離層への影響を研究するため、日本学術会議電離層研究委員会（委員長萩原雄祐理博）は東京天文台をはじめ全国13箇所で14日を中心に共同観測を行なったとある。参考のため、同紙の1面の一部(写真2)を載せておく。



写真2 当該新聞の1面の一部